

特集

立命館大学生命科学部 学位授与方針 (ディプロマ・ポリシー)

小 島 一 男・森 崎 久 雄

要 旨

生命科学部は、「生命科学の学術としての発展に寄与するとともに、生命科学分野の人材養成を通じて、人類の幸福と自然と調和した持続可能で豊かな社会の実現に貢献する」を理念として2008年4月に発足し、2011年度に完成年度を迎える。生命科学部では、各学科で修得が必要な専門能力の獲得と学部の教育課程に規定する所定単位132単位の修得をもって、学部人材育成目的の達成とみなし、学士課程学位を授与する。ここでは、本学部の人材育成目的、教育目標、教育課程の編成方針・実施方針、学生の卒業後に期待される活動分野、および将来計画について紹介する。

キーワード

生命科学部、学位授与方針、人材育成目的、教育目標、教育課程の編成方針・実施方針、卒業後の活動分野、将来計画

I . はじめに

21世紀は「生命科学の世紀」といわれるように、生命科学を基盤とした科学技術が社会や生活に広く浸透すると予想されている。このような状況の中で、生命科学部は、「生命科学の学術としての発展に寄与するとともに、生命科学分野の人材養成を通じて、人類の幸福と自然と調和した持続可能で豊かな社会の実現に貢献する」を理念として2008年4月に発足し、本年度(2011年度)に完成年度を迎え、2012年3月に初めての卒業生を送り出す。

生命科学部では、「化学」と「生物」の広い分野にわたる基礎教育を行い、その上に立って、応用化学科、生物工学科、生命情報学科、および生命医科学科の4学科の学問分野を深く掘り下げながら、互いに連携・融合することで、新しい生命科学の教育・研究分野を創造することを目指している。

Ⅱ．人材育成目的¹⁾ および教育目標²⁾

生命科学部は、豊かな教養と生命科学分野の幅広い素養を基礎に専門的力量を有し、生命科学と関連分野の発展に寄与するとともに、人間の幸福と自然が調和した持続可能で豊かな社会の実現に貢献できる人材を育成することを目的とする。

各学科における人材育成目的は、以下のとおりである。

応用化学科は、物質・生体分子の機能の解明や新物質を創製するための化学の理論と技術を教育研究し、材料化学からエネルギー、生命まで幅広い分野で応用展開できる人材を育成することを目的とする。

生物工学科は、化学、生物学、生化学、医科学などを基礎に生物工学を教育研究し、環境と生物・人間社会との関連性を理解しながら、生物工学の方法を応用展開できる人材を育成することを目的とする。

生命情報学科は、生命科学と情報科学を教育研究し、生命科学と情報科学の融合によるライフサイエンスの探究およびライフサイエンスの新たな方法を創生することができる人材を育成することを目的とする。

生命医科学科は、基礎生物学、生物工学および基礎医科学を教育研究し、生命科学に携わる者として必要な生命倫理、公衆衛生学などを修得し、生命現象の理解とともに人体の構造、機能、医療について学識を有する人材を育成することを目的とする。

生命科学部では、このような人材を育成するため、以下1～5に示すとおり、卒業時において学生が身につけるべき能力（教育目標）を定めている。

- 1 豊かな教養や国際化の進展に対応できる素養を持つ
- 2 数学・自然科学の基本原則を十分に理解している
- 3 生命科学を学ぶ上で基礎となる基礎的知識（化学、生物学、基礎医科学など）を修得している
- 4 生命科学がヒトや環境に及ぼす影響やその結果についての社会的責任を理解している
- 5 各学科の専門性に合わせた専門力量を修得している

上記5の各学科で修得が必要な専門力量は、以下のとおりである。

応用化学科：化学を基盤に、材料科学から生命科学まで広く学び、エネルギー、ナノテクノロジー、および生命系への応用などの社会が求める重要課題に挑む能力

生物工学科：化学の視点から生物の構造や機能を解明し、バイオテクノロジーの新たな領域を開拓する能力

生命情報学科：生命科学と情報科学が融合したバイオインフォマティクスで生命現象の解明に挑む能力

生命医科学科：基礎生物学に加え基礎医学を学び、疾病予防法・診断法の開発、新たな治療法や医薬品の開発など生命医科学の発展に寄与する能力

これらの能力の獲得と学部の教育課程に規定する所定単位（基礎科目 24 単位、専門基礎科目 20 単位、共通専門科目 24 単位、専門科目 56 単位、自由選択科目 8 単位、計 132 単位）の修得をもって、学部人材育成目的の達成とみなし、学士課程学位を授与する。応用化学科においては学士（工学）を得ることができるが、一定の科目群から 12 単位以上修得した学生は学士（工学）でなく学士（理学）を得ることができる³⁾。生物工学科においては学士（工学）を得ることができる³⁾。生命情報学科においては学士（理学）を得ることができるが、一定の科目群から 12 単位以上修得した学生は学士（理学）でなく学士（工学）を得ることができる³⁾。生命医科学科においては学士（理学）を得ることができる³⁾。

Ⅲ．教育課程の編成方針・実施方針²⁾

生命科学部では、上述した教育目標を達成するために、以下に示す 1～5 の教育課程を編成し、実施している。

1 豊かな教養や国際化の進展に対応できる素養の修得

幅広い教養を身につけるため、各々の目的・興味に応じた教養科目を学ぶ。また、国際化の流れの中で、英語運用能力を身につけるため、1・2 回生時に基礎科目の英語を学修し、3 回生時に専門英語を学修する。

教養教育について、具体的には、全学共通の教養教育科目 A 群を 25 科目 50 単位および B 群としてスポーツ関係科目と特殊講義を開講している。これらの中から、一分野を集中して履修するか、もしくは多くの分野から広く履修するかを学生が選択する。さらに、学部独自に、日本語リテラシー科目として「特殊講義（日本語表現法）」および「アカデミックライティング」を開講し、読解力および作文力の養成を行っている。これら 2 科目は、実験レポートあるいは卒業研究論文の作成等に役立つはずである。

英語教育について、具体的には、生命科学部の学問領域の特長を踏まえて、研究成果を英語で国際的に発信する能力を養成することを目的に、生命科学部・薬学部共同プログラムとして「Project-based English Program」（プロジェクト発信型英語プログラム）を設置している^{2) 4)}。1 回生～3 回生までの本プログラムにおける英語学習を通じて、4 回生時の卒業研究においては、研究論文のアブストラクト（概要）を英語で執筆できる能力の獲得を目指している。英語の基本スキルの習得を目指した「英語 S」は、入学後のプレイスメントテストの結果をもとに、能力別に少人数クラス（16-20 人）にて実施している。英語でのコミュニケーション能力・発信力の育成を目指したプロジェクト型科目「英語 P」では、専任の講師陣により英語運用能力の基礎を養う授業を展開している。また、英語教員と生命科学部・薬学部専門科目担当教員で構成する英語教育運営・連絡委員会を設置し、密に連携を取ることで、この教育システムの適切かつ効果的な運用を行っている。

2 数学・自然科学の基本原則の十分な理解

生命科学の専門教育において基盤となる数学・自然科学系科目を、専門基礎科目として学修する。

具体的には、1 回生時から数学や自然科学の素養を修得し、科学的な思考力・洞察力を養成

して、専門科目を学ぶ基礎を身につけるようになっている。これらの科目は、学科を横断するような体系で実施しており、どの学科に所属していても必要な科目群として位置づけられている。

3 生命科学を学ぶ上で基礎となる基礎的知識（化学、生物学、基礎医科学など）の修得

生命科学は化学、生物学、医科学、物理学などの総合科学である。生命科学分野での専門を極めるには、この総合科学を支える基盤を学ぶ必要がある。生命科学部では、化学分野と生命・医科学分野を2つの柱と位置づけ、これらの分野での基盤科目を共通専門科目として配置している。

共通専門科目は、1回生後期から2回生にかけて、学科を横断するような体系で実施している。

4 生命科学がヒトや環境に及ぼす影響やその結果についての社会的責任の理解

生命科学は、人間を含む生物（生命体）をも研究・実験の対象にするものであり、研究者・技術者は研究開発だけでなく、その技術が社会や環境に与える影響に対しても的確な認識を持つ必要がある。そのため、技術者倫理教育を目的とする「生命科学と倫理」を共通専門科目に位置づけ、配置している。

5 各学科の専門性に合わせた専門力量の修得

専門基礎科目、共通専門科目の履修後、それぞれの学科の学問領域を掘り下げていくための専門科目を配置している。

各学科の独自の専門科目だけでなく、境界領域の専門科目を学科横断科目として配置している。実習・演習科目と講義科目は密接に連携して学び、4年間の集大成である卒業研究につなげる。卒業研究では、学生の多様な要望に応えるために、学習到達度を考慮しつつ、生命科学部および薬学部計5学科間で学科を横断して所属研究室を一定の範囲内で選択可能とするシステムを導入している。

各学科の専門科目は、系統履修説明図により科目を目的別（自ら問題を発見し解決する能力を研ぐ目的、科学的基盤を形成する目的、研究に必要な基本技術を獲得する目的、研究者として必須の英語でのコミュニケーション能力を高める目的、など）に分類している。さらに、それぞれの学科では、将来取り扱う研究テーマをモデル別に分類し、その分野で履修を推奨する専門科目を履修上の参考として配置した、複数の履修モデルを定めている。

各学科における履修モデルを以下に示す。

応用化学科：応用化学重点型モデル、生命化学重点型モデル

生物工学科：環境科学重点型モデル、バイオテクノロジー重点型モデル

生命情報学科：バイオインフォマティクス重点型モデル、構造ゲノミクス重点型モデル、生命科学重点型モデル

生命医科学科：基礎医学重点型モデル、社会医学重点型モデル、IT重点型モデル

上記の1～5以外に、初修教育として、各種入試方式による入学者の基礎学力の把握と充実のために、新入生オリエンテーション期間中に理科のプレイズメントテストを行い、高校理科について各自の到達度を認識させている。到達度が低い学生については随意科目である初修物理、初修生物の履修を指導するとともに、「化学・生物駆け込み寺」の積極的な利用を呼びかけている。

また、導入期教育－1回生小集団教育－として、学生に、生命科学部の教育理念や教育システム、各学科の専門教育体系を深く理解させるとともに、大学で「主体的に学ぶ姿勢」を涵養するために、学科を分割した少人数クラスで、専門科目である基礎演習を通年実施している。

以上の教育課程の編成方針を図示すると、図1のようになる。

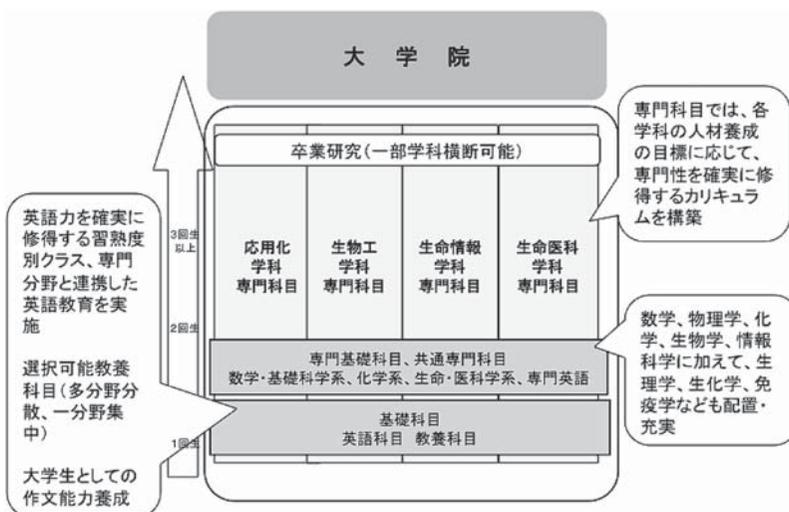


図1. 教育課程の編成方針⁵⁾（図中の専門英語は正しくは3回生配当である。）

なお、各学科での学び、については、履修要項²⁾に次のように記載されている。

(1) 応用化学科での学び

身の回りを見渡してみれば、私たちは実に様々な物質に囲まれて生活していることが分かります。これらの物質はすべて原子・分子から成り立っています。「化学」とは、これらの物質の構造、性質、反応を原子・分子のレベルで解明し、さらに新しい物質や反応を構築していくためのものです。「化学」が生み出す様々な物質なくしては、現在の私たちの生活は成り立たないと言ってもよいでしょう。「化学」が研究対象とするものは、地球上のみならず宇宙までをも含め、この世に存在するあらゆる物質へと、さらには生命やそれを取り巻く環境へと大きく広がっており、様々な科学技術を支えるとしても重要な役割を果たしています。

現在の私たちの生活を支えるエネルギーの多くは、石油を代表とする化石燃料によってまかなわれています。しかし、化石燃料が有限であることや、地球温暖化などの様々な環境問題を考えれば、太陽電池や燃料電池といった代替エネルギー源の開発が急がれます。そして「化学」によって創り出される様々な高機能性材料は、それらの代替エネルギー源の開発を支える重要な役割を担っています。

一方、私たち人間を含め、生物体は様々な分子、たとえばタンパク質、核酸、脂質、糖質など、いわゆる生体分子から構成されています。「生命系への応用」として、「化学」の研究手法を用い

て、これらの生体分子とそれに関連する生体反応を研究する領域があります。

「ナノ」とは 10^{-9} という意味で、n という記号で表されます。たとえば1 nm (ナノメートル) は 10^{-9} m、つまり10億分の1メートルを表します。「ナノテクノロジー」とは、物質をナノメートルの領域で自在に制御する技術のことです。たとえば、ドラッグデリバリーシステムに代表されるような医療への展開などもその一つです。

以上のように、応用化学科では、「化学」を中心に、材料から生命科学まで幅広く学ぶことにより、「エネルギー」や「ナノテクノロジー」、「生命系への応用」など、社会の重点課題に挑む人材を育成します。

(2) 生物工学科での学び

自然環境を保全・修復し、安全・安心な持続的社会的実現のためには、食料問題、資源・エネルギー問題、環境問題等の諸課題に取り組む必要があります。そのために、化学的素養を備え、環境と生物・人間社会との関連性、生物の相互作用および多様性を理解し、生物の持つ力を有効に活用できる人材が求められています。

生物工学科では、生物の構造・機能を支える化学的基盤を先ず学びます。この基盤に立ち、生物の持つ多彩な機能を有効に活用する方法を学習します。さらに、自然環境がどのように成り立ち、変動しているのか、また変動を引き起こす因子は何なのかを、生物の分布・機能と関連づけて理解します。

歴史、社会に関する視点も学びながら、未来を予測し、今後ますます重要となる食料、資源、環境、エネルギーに関連する諸課題に取り組む力を養います。

(3) 生命情報学科での学び

① 学科の紹介

生命情報学科では、生命科学と情報科学の基礎的素養がバランスよく修得できる諸科目を配置しており、将来生命科学分野において情報科学と生命科学の知識を生かし、研究所研究員や学校教員として、様々な点で指導的役割を發揮する人間の育成を目標としています。

② 教育目標

1. 生命科学および情報科学の専門知識と技術を身につける。
 - 生命現象や生体分子について生化学や分子生物学の言葉を用いて説明できる。
 - 生命科学の公開ソフトウェア、データベースを使いこなすことができる。
 - 基本的なプログラムの設計、コーディングとデバッグができる。
 - 生命科学の基礎となる実験操作技術を身につける。
2. 上述した1での専門知識と技術を基盤として、生命現象に付随する問題の解決ならびに新たな問題の提起ができる能力を身につける。
 - 生命現象に関する科学文献を生命科学と情報科学の両側面から理解し、自らの問題解決を図るとともに、新しい概念、問題点の提起ができる。
 - 生命現象を解明するための有用な解析ソフトを立案し、作製することができる。
 - 生命現象に関する科学文献に基づき、自らの実験を組み立て、新たな手法や結果を導く

ことができる。

1 回生

生命情報学を学ぶための土台となる物理学、化学、生物学、数学の基礎を習得する。さらに情報科学の基礎を学び、基本的なプログラミング能力を身につける。

2 回生

生命科学及び情報科学の専門的な基礎知識を修得する。生命現象や生体分子について生化学や分子生物学の用語を用いて説明できる。生命科学に関連した公開ソフトウェア、データベースを使いこなすことができる。分析化学・生化学の基本的な実験手法を修得する。

3 回生

生命科学と情報科学の専門知識を習得し、生命現象に関わる諸問題を理解する。さらにタンパク質やDNAに関するコンピュータ実習や遺伝子工学的実験をとおり、生命科学に関する諸問題を解決するための基礎技術を修得する。

4 回生

3回生までに習得した生命情報学の専門知識と技術を基盤として、卒業研究の中で生命現象に関わる問題を自ら解決し、さらには新たな問題提起ができる能力を身につける。原著論文を読み、理解し、プレゼンテーション能力を身につける。

(4) 生命医科学科での学び

21世紀を迎えた今、わたしたちは、様々な科学技術の恩恵をこうむることで大変便利な暮らしを送っています。一方で、健やかな生活を営む上で解決しなくてはならない多くの問題に直面していることも事実です。特に、環境破壊に伴う未知の疫病の発生、高齢化に伴う老年病の増加、社会生活の変化に伴う生活習慣病の多様化など、わたしたちの健康に直接関係する問題への対応が急務となっています。

このような状況の中、生命医科学科では、「予防医学」を重視した医科学教育・研究の展開を目指します。「ヒト」における複雑かつ精緻な生命現象を探求することで「健康な状態とはどのようなものか?」、「どのような原因やメカニズムで病気になるのか?」を解明し、その成果に基づいて新しい疾病予防法および診断法の開発を進めていきます。さらに、それらの基礎研究の成果を、人々の社会生活に直接役立てることができるような医療システムの開発もあわせて進めていきます。そのために、生命医科学科の学生は、基礎生物学、基礎医学を重点的に学ぶと同時に、生命科学に携わる者として必要な生命倫理学、さらには医療の現場や実生活でも欠かせない公衆衛生にかかわることについても学習します。研究活動においては、学科・学部内の研究室間の交流はもとより、他大学や様々な研究機関の医学系・医科学系の研究室とのコラボレーションを積極的に推進することで、より発展的な研究の推進を図ります。

以上の教育・研究を通して、生命医科学科は、科学的な基盤に立って「ヒト」の根幹を理解し、21世紀における予防医学研究の発展という人類の福祉の向上に貢献できる人材の育成を目指します。

Ⅳ．学生の卒業後に期待される活動分野

生命科学部の各学科における卒業後の進路として、以下のような進路が期待される（生命科学部のホームページ⁶⁾参照）。

- 応用化学科：化学、衣料品、製薬、食品加工、電子材料、教員、公務員、大学院進学など
- 生物工学科：食品、薬品、化学工業、化粧品、資源、エネルギー、医療支援産業、環境、福祉関連、教員、公務員、大学院進学など
- 生命情報学科：薬品・医療・食品等のバイオテクノロジー分野、情報・エレクトロニクス分野、教員、公務員、大学院進学など
- 生命医科学科：医薬品、食品、化粧品、医療・健康機器、保険・医療機関、病院経営、教員、公務員、大学院進学など

キャリアサポートとして、将来のキャリア形成を早期に意識させるために、キャリアセンターと協力して春季に低回生向けキャリアセミナーを開催し、学生が正課を学ぶことの意義、現在の学びがどのように将来につながるかを、キャリア形成を含めて考えることの一助としている。2010年度より開講した後期の各学科3回生セミナーにおいては、外部講師による「進路セミナー」を行い、学生の進路選択の一助としている。自由選択科目である医療社会論においても、外部講師による講義を導入している。また、特に新設学科の生命医科学科では、2010年度より、学科教員を中心として新規就職先の開拓を行っている。

なお、キャリアオフィスのデータによれば、生命科学部4回生の卒業見込者312名について、2011年10月初旬現在で、大学院進学決定者が約37.8%、就職決定者・内定者が約25.6%となっている。これら数値は、2012年2月13日時点で、各々約47.8%、約32.1%と増加しており、両者合わせて約80%という高い割合で学生の進路が決定している。また、大学院進学決定者（約47.8%）が、他の理系学部（約30%）に比べ、かなり高いという特徴ある結果となっている。

Ⅴ．将来計画の構想⁵⁾

(1) カリキュラムの見直し

今年度（2011年度）に生命科学部は完成年度を迎え、設置時から現行カリキュラム実施して4年が経過する。この間、生命科学部は同時に開設した薬学部と一体運営を行い、カリキュラムについても、特に低回生の専門基礎科目、共通専門科目において、共通の科目を用意している。6年制の薬学部は2013年度が完成年度であるため、この時点で両学部同時に理念・目的の検証を行い、かつ、カリキュラムの見直しを行うことは困難である。しかし、生命科学部設置から3年半が経過し、現行カリキュラムで改善すべき点がいくつか出てきているため、2012年度新入生から適用するカリキュラムを、薬学部との共通部分に影響を及ぼさない必要最小限の範囲で見直した。

2014年度には、理念・目的の検証を行い、必要であればカリキュラムの大規模な見直しを行うことになる。その際、英語教育、専門基礎教育、実験を含む専門教育の教育内容やカリキュラ

ム構成等、学部の教育・研究の理念と対比させた到達点と課題の整理を行う。特に、生命科学部内における実験科目の独自性と効率化の点検を実施し、適切な運営組織を整備する。

（2）導入期教育の充実

入試方式毎の志願動向（志願者数、学力分布等）、入学後の成績推移、進路先等の追跡調査を行い、入学政策を策定するとともに、多様な学生を受け入れるために入学前も視野に入れた導入期教育におけるより効果的な教育指導の展開を行う。

（3）英語教育、日本語リテラシー教育および初修教育の展開

学部独自に実施している英語教育、日本語リテラシー教育および初修教育の到達点を検証し、課題の洗い出しを実施し、その対応策を策定する。

（4）キャリアサポートの推進

キャリアセンターと協力し、キャリア支援セミナーの有効性と課題整理を行い、より有効性の高いセミナーを目指す。また、生命科学部としての就職先開拓方針を再検討し、推薦を主体とした進路支援体制を強化する。

（5）FD（ファカルティー ディベロップメント）活動の一層の推進

学生が自分の成長を実感し、同時に教員側も人材を確かに育成していることを確認するためには講義改善のためのFD活動の推進が欠かせない。FD活動に関しては、全学的には教育開発支援課を中心に活発な活動が展開されており、生命科学部としても、Webによるアンケートシステムの構築やコミュニケーションペーパー・インタラクティブシートの活用によって、学生と教員との意見交換を通して授業の改善が一層進むよう図っていく。

（6）国際化の推進

生命科学部の英語教育は特徴的な「発信型」である。具体的には、上述のように、リスニングとスピーキングを中心にし、ライティング、リーディングを合わせた4つのスキルを確実に身に付け、それを基盤に学生各自が個人の関心事をテーマにリサーチを行い、英語で自由に発信するコミュニケーション能力を養うことを目指している。この特徴あるプログラムをインターネットを通じて世界に発信し、さらに高度な英語教育プログラムの開発を目指す。また、海外短期留学やAPU-RU連携など獲得した能力を実践する場の拡大を目指す。さらには、海外からの留学生受け入れプログラムを充実し、多様な文化的背景が共存する「場」で個々の学生が国際的視野を獲得できる環境作りを目指す。

生命科学部では、開設当初より国際社会にむけ情報発信できる人材の輩出を英語の教育目標の1つに掲げており、英語活用のための4つのスキル（リスニング、スピーキング、ライティング、リーディング）を確実に身に付け、それを基盤に学生各自が設定したテーマについてリサーチを行い、まとめたものを英語で発信するコミュニケーション能力を養うことを目指してきた。この特徴あるプログラムの到達点を検証し、さらに有効なプログラムを開発していかなければならな

い。

上記プログラムで培った力を一層高度なものにするために、留学プログラムの充実、留学生の受け入れ、各種国際化事業への参画などに取り組み、実態を伴った国際化の進展を図っていく。

(7) 大学院生命科学研究科

大学院生命科学研究科が 2012 年度に発足する。生命科学部および薬学部の教員が研究指導を担当する。内部進学者の確保はもちろん、学外に対して特別入試、一般入試、留学生入試、および社会人入試の広報活動を強化し、全体として前期課程および後期課程の安定的な定員充足を目指す。また研究政策とも関連させて、国際化や研究力強化（評価の高い国際学術誌への論文発表や学外資金の獲得を増やすなど）を図り⁷⁾、魅力・競争力のある大学院をつくっていく必要がある。生命科学部では、2011 年度に若手教員奨励賞と修士論文優秀賞の制度を設け、表彰を行う。特に国際化に関しては、この 3 年間実施してきている関西医科大学との戦略的連携事業における海外視察の成果などを基に、欧州やアジアの大学との連携を目指し、大学院学生・教員の相互交流や研究の国際化を具体化する。

学部にも言えることであるが、「生命科学」という名称から、ややもすれば理学系のこじんまりとした研究科と受け取られがちであるため、工学面の打ち出しも積極的にダイナミックに行い産学連携などを進める。教育面では、戦略的連携事業で整備した情報機器などを活用して動画などの教育コンテンツを作成するなど、学部教育を含めて専門教育の高度化が期待される。

注

- 1) 生命科学部学部則
(http://www.ritsumei.jp/lifescience/pdf/seimei_gakubusoku.pdf 2012 年 1 月 27 日)
- 2) 生命科学部 2011 年度履修要項
- 3) 著者の判断で、わかりやすい表現に変更している。
- 4) 鈴木佑治、立命館大学生命科学部・薬学部「プロジェクト発信型英語プログラム－Project-based English Program」の理論的基盤と実践、立命館高等教育研究、第 10 号、pp. 44-61、2010 年 3 月
- 5) 2011 年 学園通信特別号 生命科学部版
- 6) 生命科学部 主な進路就職先 (http://www.ritsumei.jp/lifescience/lifesc08_j.html 2012 年 1 月 27 日)
- 7) 2012 年 3 月末に生命科学部年報を発行し、4 年間の教育・研究活動をまとめる。

Diploma Policy in the College of Life Sciences, Ritsumeikan University

KOJIMA Kazuo (Professor, College of Life Sciences, Ritsumeikan University)

MORISAKI Hisao (Professor, College of Life Sciences, Ritsumeikan University)

Abstract

Life science will make substantial contributions in the crucial fields of environment, food supply, and biological resources to help humankind achieve sustainable development that is symbiotic with nature. The College of Life Sciences, Ritsumeikan University has been established in April of 2008, and the academic year of 2011 will be the one of its completion. The College engages in efforts towards clarification of both the “mechanism of life” -- humankind’s eternal theme -- and global issues concerning energy, environment, and so on.

As for diploma policy of our College of Life Sciences, when acquiring both the technical faculty which is necessary to master in each department in the College and the 132 credits that are prescribed in educational course of the College, students can get their diploma of this College. Here, we introduce diploma policy, goal of fostering human resources, objective of education, curriculum policy and its enforcement, graduate prospects, and future plans in the College.

Key words

College of Life Sciences, Diploma Policy, Goal of Fostering Human Resources, Objective of Education, Curriculum Policy and Its Enforcement, Graduate Prospects, Future Plans

